

白馬のスキー伝来とそのあゆみ

丸山 庄司

白馬のスキー伝来とそのあゆみ

今年でスキー伝来100周年を迎えた白馬村は、様々な企画をした。そのメインとなる催し「白馬雪まつり」は2月8日から10日間にわたり各スキー場で盛大に行われた。国内だけでなく、海外から訪れた人々にも喜んでいただいた。

白馬村では、村長が先頭にたち「2013年白馬スキー伝来100年宣言」を別掲のように謳いあげシーズンに突入した。(資料1)

また、白馬山とスキーの総合資料館でも「白馬スキー伝来100年のあゆみ」をまとめて「これからの白馬への提言」を別掲のように提案した。(資料2)

その作業のために私たちは、スキー伝来から現在までを、多くの資料をたどり10項目にまとめる作業をしていた。その資料の中に大町の先輩の方々に、ご指導とご協力いただいた箇所が随所であり、白馬のスキーは大町と大きなかわりのなかで歩んできたことを改めて感じている。



写真1 レルヒ少佐

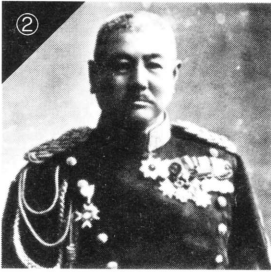


写真2 山口十八少佐

福岡孝行先生と赤い糸

1911年1月12日、オーストリア・ハンガリー帝国の武官のレルヒ少佐(写真1)が、新潟県の高田において歩兵58連隊にスキー指導をした。この日が「日本スキー発祥の日」となったのは周知のことである。その第58連隊の中に山口十八参謀(写真2)がいた。山口参謀は近衛師団にいたが、乃木大将の命により第58連隊に転出、レルヒ少佐の指導のもとで、スキーの研究を命ぜられたのである。またフランス語が堪能でレルヒ少佐の通訳も務めた。山口参謀はそれを契機にスキー術の研究をし、多くの著書や論文を発表している。

その山口参謀の娘、華子さんは福岡孝行先生の奥さんである。福岡先生はスキーについて義父山口参謀から多くの影響を受けたようである。白馬山とスキー総合資料館の「福岡孝行記念室」には貴重なスキーが展示されている。そのスキーこそ、山口参謀がレルヒ少佐から当時いただいたものだという。

福岡先生が戦時中、疎開地を白馬に選んだのは、細野(八方)の太倉定雄さんと交友があつたからである。太倉さんは山岳の名ガイドとして世に知られ、先見性のある方だった。スキーについても大正8年には、新潟県奥温泉の笹川速雄さんと出会い、スキーの手ほどきを受けている。高価なスキーもいち早く購入する

など、白馬のスキー草分けの人である。年代は違ふが福岡先生も、スキーの師匠は笹川速雄さんだった。その笹川さんの影響でスキーの虜になったと聞いた。

笹川さんは富山師範教諭の内山数雄さんら名で、大正10年3月31日平岩口から白馬岳積雪期初登頂と、大雪渓のスキー初滑降に成功し4月2日に下山している。スキーの名手だったの

— 2013年 白馬スキー伝来100年宣言 —

白馬村は、北アルプス白馬連峰をはじめとする、雄大で美しい恵まれた資源を活かし、スキーにより発展してきました。

白馬村で生きる者として、この雄大で美しい自然と、その中で満喫できるスキーを、後世に引き継ぐことは私たちに課せられた大きな責務です。

私たちは、白馬にスキーが伝来して100年となることを機に、これからも、この自然環境を保全していくとともに、スキーなどスノースポーツが誰からも愛され、生涯スポーツとして親しめる環境づくりを目指すため、ここに白馬スキー伝来100年を宣言します。

記

- 一、私たちは、スキーによって栄え発展してきた歴史と先人たちが築き上げてきたこの村を愛します
- 一、私たちは、スキーなどスノースポーツを通して知り合った全世界すべての友人を大切にします
- 一、私たちは、スキーなどスノースポーツを楽しみ、その素晴らしさを広く知らしめます
- 一、私たちは、スキーなどスノースポーツを未来につなげるため、自然環境の保全に努めます
- 一、私たちは、スキーなどスノースポーツを通して青少年の健全育成に努めます

白馬村 村 長

資料1

— 2013年これからの白馬への提言 —

白馬・山とスキーの総合資料館は、白馬スキー伝来100年にあたり、スキーを中心としたスノースポーツの更なる振興と発展を希求いたします。

登山とスキーがこの地域にもたらされて以来大きな変貌を遂げてきた白馬。山岳観光と伝統的な農業を基盤とした豊かな山岳リゾートとして益々発展してゆくことを願ってやみません。

豊かな山岳観光資源と山麓の美しい田園風景が調和した四季のアウトドア・ツーリズムを推進出来るよう、地域一体となって「岳、雪、花、温泉、文化遺産」の環境保全に邁進することを提言します。

白馬・山とスキーの総合資料館

資料2

である。

さて、大町の丸山彰さんは大町南高校(大町高校)の先生で、福岡先生とは深い絆で結ばれていた。スキーの1級を取得したのも同じころで、八方尾根リーゼンスラローム大会を始め、この地域で数多いご両人の活動がある。

その中のひとつに、中信地区高校体育連盟主催のスキー講習会がある。昭和22年9月、丸山さんは細野(八方)に疎開中の福岡先生を訪ね、高校生のスキー講習会開催の意見を請うた。話を聞いた福岡先生は「当地の高校生にスキーの種を時きましよう」と言われ意気投合したという。こうして講習会は始められた。

最初、生徒の参加は150名だったが、30年後には2000名から3000名もが参加するまでになった。それに対応して、まず先生方の指導者講習会を行い、「生徒の講習会には先生が行うシステムに発展していった。体育専門の先生ばかりでなく、国語や数学など他の教科の先生から、スキーを教わる。生徒たちは最初は驚き、そして尊敬のまなざしに変わったという。私も福岡、丸山両先生の指示で、16年間ほど指導者講習会を担当した。当時、鹿島槍国際スキー場に集まった先生方の、熱気を今も鮮明に覚えている。それにしても、「良い種を時いた」ものだと思う。

福岡先生は、大町山岳博物館にも創設のころ関係されていて、後に顧問の立場で協力したとも聞いた。この大北地域の中にあつて、福岡孝行先生との交友のあつた方はまだ多くおられ、深い絆と赤い糸で結ばれている。ここではその一部の方を紹介させていただいた。

白馬岳滑降競技大会

1939年(昭和14年4月3日)「白馬岳滑降

競技大会が開催された。

プロフィールをみると、現在の感覚でもそのスケールの大きさに驚く。なんと柵池自然園の上部、天狗原からスタートしゴールの落倉まで、全長10km超のロングコースの大会である。しかも、全日本スキー連盟公認大会として開催している。

開催の組織を見ると、主催：大町スキー倶楽部、白馬スキー協会、役員長：小野広中(長野県体育主事)、審判長：岩崎三郎(全日本スキー連盟技術委員)の面々。

さらに優勝トロフィーは、壮年組(長野県知事杯)、成年組(小島全日本スキー連盟会長杯)登山案内人組もあつて、白馬スキー協会(長横沢三右衛門杯)の組別に贈られている。そのらの草大会でなく、れつきとした全日本クラスの大会なのである。

その経緯を調べて見ると、大町の平林武夫さんの大きな尽力によつて実現したのであつた。平林さんは大町スキー倶楽部の設立者の一人であると同時に、長野県代表として、全日本スキー連盟の代表委員になるなど全国的にも活躍された方である。

多くの活動のなかで、全日本スキー連盟技術章検定会の全国4会場の一つを大町に実現させている。そのときの検定員として来町した各務良幸さんは、海外のアルプスに数多く出かけている山岳スキー家であつた。その各務さんが、柵池滑降コースの素晴らしさを述べ大会開催を勧めたという。それを聞いた平林さんの動きは早かつた。賛同し各務さんと協力して、全日本スキー連盟や長野県にも働きかけた。地元である、北城村にも働きかけ実現にこぎつけたのである。当時の記録を見て、改めて平林さんの先見性とその行動力に敬服するのみである。

共催した白馬スキー協会長の横沢三右衛門さんは医師であり、スキーに理解がある方だつた。私が子供のころ横沢医院に行くと、スキーをするのを知つていて、励まされた記憶がある。100年前、白馬のスキーは小学校の先生が高田からスキーを購入し、子供たちに滑つてみてさせてスキーの事始めをしてくれた。

後に登山案内人が雪山の案内にスキーが有効ととらえ、白馬で初めてスキー講習会を開催するなど積極的に取りくんた記録がある。

白馬のスキーは登山案内人によつて大きく進展したのである。この白馬岳滑降競技大会の組別に異例ともいえる「登山案内人組」があるのもうなずける。そして優勝者に地元横沢三右衛門杯をだしたのもその背景があつたからだと思う。この大会は昭和16年の3回まで開催されたが、4回目は戦争状態が急を告げ中止せざるを得ない状況になつたという。

八方尾根リーゼンスラローム大会

1947年(昭和22年)八方尾根リーゼンスラローム大会が開催された。

昭和20年8月15日終戦となり、戦争の傷跡が随所にのこり、誰もが傷心に沈み、物資の窮乏にあえいでいたときであつた。細野(八方)に疎開中のスキー理論家でもある福岡孝行先生は、「これからは平和な時代がきて、必ずスキーが盛んになる。墨菱から集落に近い尾根にスキーコースを開いて、スキー場づくりをしよう」と提案した。

村人も呼応して地主交渉から伐採まで、福岡先生と共に汗と知恵をそそいだ。そして早くも翌年の秋には、全長4.5kmのコースができ、八方尾根リーゼンスラロームコースの誕生である。名付け親は勿論、福岡先生である

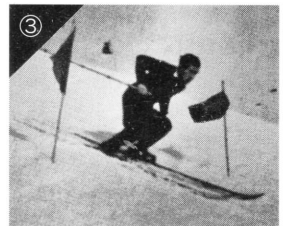


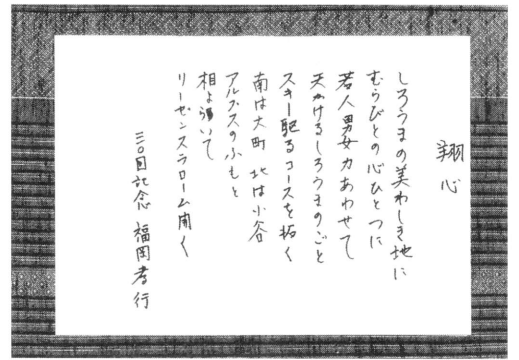
写真3 前走する福岡孝行先生
ことはいふまでもない。
その翌年の昭和22年3月には(終戦からわずか1年7ヶ月)、当初からの計画通り、第一回八方尾根リー

ゼンスラローム大会の開催にこぎつけた(写真3)。八方尾根にふさわしい長い距離を、リーゼンスラローム(大きいターンの滑る、スケールの大きい大会を開催して、八方尾根を世に広めようとしたのである。しかし、リフトも雪上車もない時代、4.5kmのロングコースだけに大会開催には問題山積であつた。

大会の権威付けに長野県スキー連盟後援の取り付けと、戦時中規制のあつた列車内のスキー持ち込み禁止が、まだ解除されていなく、その許可の陳情があつた。これには福岡先生と地元の大谷定雄さんが担当し、二人の人脈と熱意でそれぞれが解決した。後援を取り付け、列車にスキー持ち込みの許可証は、東京、大阪、名古屋、甲府各駅で特別発行されたという。

競技の運営も苦勞の連続だつた。ポールセツトは1週間前に、近くの木を切つてコースオープンにして、整備の助けとした。大会運営のための器具など、特に計時用のストップウォッチは大町の学校からも借りて間に合わせた。競技役員は地元だけでなく、大町からは丸山彰さん、北沢利一さんらが、小谷からは山田寛さん、前田利夫さんらが協力してくれた記録がある。

この人たちは福岡先生と深い絆の中での協力であつた。こうした体制での大会は長い年月にわたつて続けられ、丸山彰さんと山田寛さんはご存命中大会顧問としてプログラムに掲載され



資料3 リーゼン大会30回の記念碑の福岡孝行先生直筆の原文。記念碑は、名木山ゲレンデ、旧スキーセンター跡地にある。

翔心

しろうまのまわし地に
むらびとりの心とつば
若人男女カあわせて
天かけるしろうまうじと
スキー走るコースを拓く
南は大山 北は小谷
アルプスうまも
相よほいて
リーゼンスラローム開く
三日月念 福岡孝行

ていた。そのほかにも多くの方々の協力があつたと思う。

30回大会のとき、名木山のゴール付近に記念のケルンを建立した。そのケルンの銅版に刻んだ福岡先生の詠まれた詩は、その様子を的確に捉えている。「翔心」と題された詩には、「南は大山 北は小谷 アルプスのふもと 相よらいて リーゼンスラローム開く」とあるように、大山と小谷の人たちがよらつて手伝つてもらつての大会運営だつた(資料3)。

今年、福岡孝行先生の生誕100年になる。福岡先生がかねてから話していた、「白馬山麓は(大系線沿線)大山から小谷までみんなで協力し合つて、一体化したりゾートにしなければならぬ」との言葉を改めて感じている。

第23回国民体育大会スキー競技会

白馬村が、かねてからの念願であつた国体スキー競技会を開催したのは昭和43年(1968)である。過去には長野県で、野沢温泉が2回、山ノ内町で1回開催されている。

白馬が4回目となつた。

白馬村のスキー場は大分整備され、大会運営の経験も積んできたので、国体スキー競技会を白馬村に招致しようとの機運が高まつてきたのだつた。

昭和41年5月29日付けで、白馬村長太田新助より、開催申請書が国、長野県に提出された。その主旨は次の内容であつた。

「本村は白馬岳を主峰とする北アルプス山麓の村であります。八方尾根とその周辺のスキー場は、施設の充実により、漸く関係各位に紹介され、全日本選手権大会のアルペン競技会等を開催させていただきました。

この度、長野県スキー連盟のご推薦をいただき、競技施設を始め、交通、通信、宿舎等、それぞれの条件を整えました。昭和43年2月に開催される、第23回国民体育大会冬季スキー競技会の開催地として、ご決定いただきたく、下記の参考事項を添えて申請いたします。」

下記事項として、アルペン競技は八方尾根で全選手が同一条件で競技できるように運営する。ジャンプ台を新設し、全日本スキー連盟の公認をいただく。宿舎については細野地区(八方)とほかで、2万人収容が可能など付記した。

村では、白馬国体招致実行委員会を結成。松沢安蔵村長が委員長になり、全村挙げて招致活動を展開した。

その後、全日本スキー連盟の現地視察が行われ、丸山弥兵衛白馬村体育協会長ほかスキー専門委員が説明と要請をした。こうした招致活動が実を結び、ようやく白馬国体開催の決定を見ることができたのだつた。

開催の前年には、第22回国体スキー競技会の青森県大鰐町に視察団を派遣した。团长塩島房雄以下62名が、総務、経理、広報報道、宿舎、

交通、式典、施設、警備、競技に分かれて視察をし、翌年の白馬開催に備えた。

長々と述べたが、当時は国体スキーの開催希望地が多く、オリンピック招致のように競争が激しかった。長野県スキー連盟の推薦さえも大変だつた。ノルディック種目の運営など、まだ白馬は無理だとまで言われた。当時では当然だつたかもしれないが、今振り返ると長野オリンピックの招致活動と重複して思い出されてくる。開催決定の知らせに万歳をして喜んだものだつた。

アルペンは八方尾根リーゼンスラロームコースで、ゴンドラ終点から500mほど下からスタートし、ゴールは名木山ゲレンデ下部。

一番の難問だつたジャンプ台の建設は、名木山のリフト横(現在のスモールヒルの位置)に新設された。総工費4500万円は、雪印乳業株式会社の多額の寄付と、県の補助金などにより、「白馬雪印シャンツェ」として実現した(写真4)。また、雪印乳業はその後、ジャンプチームをつくり、長野県スキー連盟に加盟、長野県のジャンプのレベルアップに貢献した。クロス

カントリーコースは、ジャンプ台の下に続く平地を発着場にして、細野(八方)集落内の道路に2基、和田野集落に1基の陸橋を建設して15kmのコースを作つた。

3会場が直径300mの円形の中にあり、その中央の位置に仮設建屋の大会運営本部を設置した。その利便さは運営面だけでなく、各

都道府県選手団や観客にも大いに賞讃された。このようなコ



写真4 第23回スキー国体大会ジャンプ会場

山と博物館 第58巻 第1号
発行 二〇一三年一月二十五日発行
〒398-0002 長野県大町市大町八〇五六一
市立大町山岳博物館
TEL 〇二六二二二〇二二
FAX 〇二六一二二二二二二
E-mail: smpaku@city.onachinagano.jp
URL: http://www.city.onachinagano.jp/smpaku/
印刷 株 奥村印刷
定価 年額 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)
郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七一一三九三

ンパクトに配置された大会は、それ以前もその後もない。

白馬村では国体を契機に、現在に続いてい

る、村のシンボル「村章」を制定した。白馬連

峰の山と円を使用して「発展と融和の白馬」を

象徴したものである。白馬国体のモットーは「清

新、協調、歓喜」、大会スローガンは「心をこ

めて迎えよう白馬国体」だつた。

2月15日9時30分、白馬中学校グラウンドで

開会式が行われ、熱戦の火ぶたが切られた。長

野県選手団の旗手は地元の中村孝光がつとめ、

18日まで4日間わたる大会は合格点をい

き幕を閉じた。

白馬村民一丸となつて関係各位の協力で成功

させ、白馬の自然やスキー場を全国で紹介でき

たことは、将来の発展に大きな意義をもつ大会

となつたのであつた。

白馬山とスキー総合資料館(館長)

※掲載した写真1〜4はすべて、白馬山と

スキーの総合資料館発行の「白馬スキー伝来

100年のあゆみ」より転載いたしました。